

よくわかる 『52 ヘルツのクジラたち』

まえがき

52 ヘルツのクジラを知っているだろうか。このクジラは、誰にも届かない声を発し続ける孤独なクジラだ。この物語の中で描かれる「52 ヘルツのクジラ」は、孤独の象徴として登場するが、それは単なる悲しみや切なさだけではなく、希望やつながりへの願いも含まれている。声にならない思いを抱えた人々が、それでも誰かとつながりたいと願う姿は、私たち自身の日常にも通じるものがあるのではないだろうか。私たちは時に気づかないふりをしている。まったり、聞くべき声を見過ごしてしまうことがある。しかし、この物語はその声に気づき、受け止める勇気を持つことの意味を教えてくれる。どうか、この物語が誰かの心にそっと寄り添い、新たな一歩を踏み出すきっかけとなりますように。

高橋爽風

第1章

52 ヘルツのクジラたち

目次

まえがき	2
第1章 52ヘルツのクジラたち	
エッセイ1	高橋爽風 4
エッセイ2	伊藤優希 6
エッセイ3	阿部将馬 8
エッセイ4	片倉悠 10
エッセイ5	高橋建人 12
映画紹介	14
第2章 キミの住んでる世界	15
あとがき	23

この小説を最初に知ったのはいつだっただろうか。2021年に本屋大賞受賞、ということとは、私が高校生ぐらいの頃だろうか。テレビでも取り上げられるほど有名な作品で、私もタイトルだけは知っていた。当時ゲームに夢中だった私は、面白そうなタイトルだなあ、という印象しか持てず、そのまま通り過ぎて行った。しかし何の因果か、その本はまた私の元へやってくることになった。ゼミ生の一人がその本を持ち寄った時、正直少し驚いた。読む機会がこんなところで訪れると思わなかったからだ。

本屋大賞一位を飾る本だけあって、一行目に「明日の天気を読んで、風俗やつてたの？」と言われた。(p.9)と出だしからぶつ飛んだ発言がされている。フウゾク。と言われた瞬間意味が分からなくてカタカナ表記になるのも、ハツとして即座に平手打ちが飛んでくるのもやけにリアルで、とても面白い。更に、田舎特有の強固な情報ネットワークの厄介さもよく表されている。痛み止めをもらいに個人病院に行っただけでヤクザに切り付けられた、とすぐに噂が広まるくらいだから、「信じられない。個人情報ダダ洩れかよ。」(p.13)と主人公が脱力して座り込むシーンは少し可哀そうに思えた。ただここで折れたりめげないのが彼女のすごいところで、「もうどうでもいいや。ヤクザに追われてる風俗嬢でも女優でも、どうとでも言えればいいじゃん。どう思われようが平気だし」(p.13)と強気な姿勢を貫いている。普通の人は周りと良い関係を築くためにここで誤解を解こうとするだろうが、彼女はバツサリとそれを切り捨てた。ここで主人公は普通の女性ではないことをはっきりと示している。

第一章の中盤まで読むと分かるのだが、何か違和感を覚えなかっただろうか？そう、主人公の名前が開示されていないのである。村中やケンタの名前はすぐ分かるものの、主人公の名前だけまだ分からない。キナコというカタカナの名前は出るものの、「貴瑚はひとの温もりがないと生きていけない弱い生き物だよ。」(p.25)と、最初に主人公の名前がはつきりと分かるのは回想シーンである。なかなか珍しいパターンではないだろうか。ここまでは貴瑚が周りに屈さず慣れ合わないタイプのサバサバした女性かと思わせて一転、彼女の弱く優しい部分も見ることができる。「どうして、私と一緒に連れて行ってくれなかったの？」(p.17)と呟いたり、雨でずぶ濡れになっている少女ムシを見て

「ねえ、あんた。こっちで雨宿りしたら？」(p.19)と声をかけてあげたりしてあげているシーンは、最初に貴瑚に与えられた印象とどこか相反しているのではないだろうか。

第二章では、貴瑚の昔の記憶を垣間見ることができ、「うつくしい光景だ。誰も冒すことのできない確かな幸福がある。ほんのりと発光しているようにも見えるそれを、わたしは遠くから眺めている。」(p.47)と幸せな光景をどこか他人事のように見つめる彼女に疑念を抱くだろう。そしてその疑念は一瞬で晴れる。「わたしはあの中には、入っていけないのだ。」そのたった一言で、彼女がただの平和で、幸せな家庭に生まれたわけではないことを知るだろう。貴瑚はただの慣れ合うことを好まない、強気な女性ではないのだ。

この本を読み進めるほど、彼女の置かれた境遇が凄惨なものであることが分かっていく。「私のこと、少しは好きだった？」(p.50)と貴瑚が問いかけたあの一言に、どれほどの気持ち込み込まれていたのだろうか。家族に愛されて育つ弟と、狭く寒い個室トイレで日々を送っていた彼女が、それでも母親に少しばかりの愛情の証をもらおうとものがく姿は、見ていられなかった。彼女を知る上で、もう一人重要な人物がいる。アンさんである。「アンさん、アンさん」(p.52)と貴瑚が苦しくなった時に助けを呼ぶ声は、52ヘルツの声だった。偶然かもしれないが、貴瑚が初めてアンさんの名前を呼ぶときと、ページ数が一致している。アンさんとは女性だろうか。男性だろうか。あえてカタカナにしている時点で性別を曖昧にさせているのが分かる。僕、という一人称から男だと推定できるが、どうもそのアンさんは今会えない状況にあるらしい。それもそのはず、彼は自殺していた。「でも、ダイヤに変えられるほど私は高潔じゃない。生々しいほど愚かで弱い人間で、そして拭えない罪を犯した。」(p.53)と貴瑚は彼を追いつめてしまったという責任をずっと一人で背負い続け、押しつぶされそうになって、この世にいないと分かっている、アンさんに助けを求めてしまっていたのだ。

そんな彼女に傘をさしたのは、ムシと呼ばれた少年だった。後に52と呼ばれる少年は、貴瑚と似たような境遇にあった。母親に虐待され、たばこの火を舌に押し当てられて喋れなくなっていた。にもかかわらず、彼は貴瑚に傘を差し出した。彼は、どういった気持ちで貴瑚に傘をさしたのだろうか。心配そうにする彼に、「ああ、お腹が痛いんじゃないんだ。何て言うんだろう。辛い、苦しい、いや違うな。ええとなんだろう……怖い。ああ、そうだ、怖いんだ。」(p.54)「ちょっとでいいから、一緒にいて。お願い。」(p.54)と、赤の他人だからこそ弱さを見せる貴瑚は、とても最初のイメージとはかけ離れたもののように思えた。貴瑚本人もこんな子どもに何をお願いしているんだらうという自覚はあった。でも彼女自身も人の温もりを求めてしまう、ただのか弱い人間だったのだ。

親に自分の人生を支配されるということ

伊藤優希

町田そのこさんが書かれた「52ヘルツのクジラたち」1冊を通して、人から受ける愛情や虐待、届けられない自分の声がベースにあり、シリ阿斯な内容が続く重たい物語であった。

物語の始まりは村中の「風俗やってたの?」(p.7)という一言から始まり、インパクトがあり、印象に残りやすい一言であることから、村中という人物は今後の物語において重要な人物である事が伝わった。物語の序盤から、貴瑚にとつて大事な人がアンという人であると書かれており、「どうして、わたしと一緒に連れて行ってくれなかったの?」(p.17)というセリフは貴瑚とアンは最後、良い別れ方をしていたいなかったのではないかと印象を持った。しかし、そのセリフの直後の「あの時のわたしは、何も見えていなかった。誰の忠告も耳に入らなかった。」(p.17)というセリフから、貴瑚の過去の行動に非があり、しかしその当時はそれが悪いことであるとは感じておらずアンも忠告はしていたが貴瑚もそれを、かたくなに聞き入れようとしなかったということが分かった。

「友人や工場の同僚たちには黙って、ひとりで大分に越してきた。実母だけはここにいと知っているけれど、あの人はわたしと縁が切れたと喜んでいいるはずだから、わざわざ来るはずもない。」(p.25)この一文は、現在貴瑚がどのような状況なのかわかる一文になっていた。すべての知り合いと縁を切り大分に越してきた貴瑚は、その引越した時の状況から、誰の目にも入らず一人で静かに人生を過ごしたかったという願いがあったのかもしれない。だが、引越してきたとたん、「周辺の住人の間で、東京から逃げてきた風俗嬢という話になっている」(p.8)という話が広がり、理想の大分暮らしではなかったのがうかがえた。そして、貴瑚の場所を唯一知っている実母も、縁が切れて喜ぶという点から、親子の仲は相当悪いものであることが伝わった。親子の仲は切っても切れない縁であり、それを切ってしまったということに不信感と悲しさを感じた。

「五年前、二十一歳だったわたしは、義父の介護に明け暮れていた。」(p.88)この言葉は一見、父親思いの良い親子関係なのではないかと最初読んだ時に感じたが、読み進めていく内に全くそういった類の物

ではないことが分かった。「義父は小さな地上輸送会社の社長で、数人の社員と数台の大型トラックを抱えていた。外面が良いせいか顧客が多く、会社は順調だったようだ。世間的に見れば、我が家は裕福な家庭だったと思う。」(p.88)この一文がどうしてでも父親を病氣から回復させなければいけないという理由になっているように思う。数名の従業員、大型トラック、そして裕福な暮らし。そのすべてが父親の病氣によって崩れてしまう危機にあったからだ。しかし、「不治の病でゆくゆくは寝たきりになると知った社員たちが、沈没船から逃げるネズミのように次々と辞めていった。」(p.88)とあるように現実には甘くなく、この時点で貴瑚の家の状況や、雰囲気が一変してしまっただけではないかと感じる。貴瑚も高校卒業後は務める会社が決まっていたが、その会社で働くことはなく父親の世話に専念することになったことから読み取れる。「母が私を介護要員にしたからだ」(p.89)「お父さんにだけ世話になったと思ってんの?」(p.89)この段階ですでに母親は貴瑚に圧力をかけていき、支配し用としていいるように感じる。それはとても不快であり、母親自身は何も手伝わず自身の子供にだけ世話をさせている様子はまるで奴隷のように扱っているなど感じた。いくら親であっても自分の子供を道具や奴隷のように扱うのは不快感を覚えた。

最初の内は貴瑚も父親の世話を頑張ろうと決めていたのかもしれない。なぜなら、義父とは言え裕福な生活をさせてもらい高校に通わせてもらっていたからその感謝の気持ちとして助けようと思えるはずだからだ。しかし、その介護が6年も続くとなるとその気持ちがいっまでも介護する理由として十分な効果を持つには長すぎるのかもしれない。そこで、母親はまだ貴瑚に介護をし続けさせるためにこのような声をかける。「あたしたち、本当に助かっているのよ。ありがとう」(p.91)その一言とともに、母親は貴瑚の手を取り労わるように撫でたり、ケーキを差し入れたりした。客観的に見れば、この行為は義父の介護を続けさせるための母親の戦略としか見れないが、幼いころ母親から十分な愛情を受けてこなかった貴瑚にとつて、「いつ以来のことだろう。かつてのように母と支え合っていたいと思っていたけれど、それが義父の病というきっかけでようやく叶ったのかもしれない」(p.91)とあるように、いつぶりの母親の愛情は、義父の介護を続ける理由として十分すぎる行為であった。このことは母の飴と鞭のような作戦で表面上は感謝を伝えているが、とても自分勝手な心の底では奴隷として見ているのだなと感じた。しかし、義父の病氣の悪化が急速に進むと母親は人が変わったかのように「あんたがちゃんとお父さんを看ていないからよ!」(p.92)と声を荒げた。この貴瑚は目を覚ましたが人生をあきらめ死ぬことを考えていた。

まるで親子の支配関係を覗き見たようで、物語の前半だけでも感情を揺さぶられる作品であった。

届かない声を聴こうとする努力

阿部將馬

町田そのこさんの『52ヘルツのクジラたち』はとても話の内容が重く、読み終えるとても苦しくなり、とても辛い話であったなと思った。さらに、この作品は現在の社会問題を取り上げてとても興味があった。

雨の中貴瑚の前に現れた少年、全くどんな人物かわからなかった。

村中がとてもいい人だと感じた。引越してきてまだ周りとなじめずにいる貴瑚に対して、ほかの住人はあまりいい印象を持たずに冷たい扱いをしている中、村中はそんな貴瑚に対して優しく、心を開かせようと努力をしているからだ。

貴瑚が今までひどい扱いをされ続け、その状況からアンさんが救いだしてくれた。ひどい扱いを受けていたとはいえ、貴瑚はほんの少しだけの愛情を注いでくれていた母親を失うのは少しづらかった。しかしの時、アンさんが言葉をかけてくれた。『第二の人生では、キナコは魂の番と出会うよ。愛を注ぎ注がれるような、たったひとりの魂の番のようなひとときと出会える。キナコはしあわせになれる』(p.51)と言ってくれたが、キナコは魂の番など存在するとは思っていなかった。でもさらにアンさんが「大丈夫、きつというよ。それまでは、ぼくが守ってあげる」(p.51)と言った。この言葉で、まだこの本を読み始めて間もないが、アンさんがとても心優しく、温かい人なのだととても良く感じた。

貴瑚が過去のことを思い出して泣きしているところにまた少年が訪れた。貴瑚の「あの、こないだは無理やりごめん。お菓子、食べてかない？ 通販で、わらび餅を買ったの。すっごく美味しいんだって」(p.55)この言葉から少年を少し無理やりでも引き留めようとしている様子が伝わった。そのあと、

「ちよつとでいいから、一緒にいて。お願い」(p.55)ここからとてもさみしい貴瑚の気持ちが伝わった。このような悲しい出来事があった時に傍に人がいてほしい気持ちがとてもよく分かった。こんな感情は一人で我慢することはとても難しく、少年のような優しい人物が貴瑚のそばに来てとてもよかったなと思った。

義父が倒れ、不治の病にかかってしまった。名の知れた会社で就職できた貴瑚に対して母は、「よかったじゃないの」(p.89)とだけ言い、貴瑚に義父が今まで育ててくれたことを理由に、介護要員になるように言ったところに対し少し不快感を感じた。

義父が入院することになり、医者が険しい顔を見ると、「あんた、わざとお父さんが病気になるよう仕向けたんでしょ！」(p.93)と貴瑚に罵声を浴びせ、看護師も正論を言い、感情を抑えようとしてくれているのにすべての責任を介護していた貴瑚に負わせて精神的にも肉体的にも限界を感じさせているところから、社会問題となっているヤングケアラーはこういうことなのかとよくわかり、貴瑚はだれにも届かない声なき声を出しているのかも知れないと感じた。

アンさんの「キナコは一所懸命に頑張ってたんだね。でも、誰も代わりにきかないことを一人でやるのは、辛かったらうね。」(p.106)とこの一言がキナコを救ったところでキナコのことをしっかりと向き合っていてほめてくれる人がついに現れてくれたと思い、自分自身とても感動した。

アンさんがキナコを家から連れ出そうと実行に移し、「助けに来たと言ったでしょう？ ぼくは、この家から彼女を連れ出すために来たんです」(p.112)とキナコの母親に言った場面で、アンさんはとても精神が強くて、人のために一所懸命になれていて、本当に心強い人だと感じた。キナコもその勢いに乗って母親に向かって自分の意見をしっかりと伝え、アンさんのおかげで少しキナコ自身強くなったんだと感じた。

アンさんの遺書で多くのこれまでの自分の悪いと思ってる部分「不完全な娘でごめんなさい」「女の子として生きられない私のせいで、あなたにいろいろな涙を流させたことは数えきれません」(p.235)のような自分の本当の性別と違う性別になったことを謝ることばかり書いていて、自分が本当に生きていきたい姿になることを自然とされるべきだと思った。偏見や理解ができないなどのようなことがたくさんあるが、その人本人が自分らしく生きれないことに対し苦しんできたんだなと感じた。

キナコが「一度目は声を聴いてもらい、二度目は声を聴くのだ」(p.280)と52が駆け寄ってきくれたところでこんなことを思っていたところで、アンさんがキナコにしてくれたように次は自分が52が魂の番を見つけることができるまで傍にいたいようにして一緒に暮らそうと言ってとても52は救われただろうしと思っただけ感動した。

52ヘルツという誰にも聞こえない声なき声を出している人がたくさんいると思う、他人の痛みについてしっかりと気づけるようになっていこうと考えさせられた作品であった。

町田そのこのは作品である52ヘルツのクジラたちは普段絶対に交わることもない人間たちが自分の過去の人生を通して似た境遇の人と人生を歩んでいく話して自分はとても内容に深く入って行くことができる作品だと思った。

まず、主人公貴瑚が心を閉ざした少年と出会って行き自分の過去と向き合いながら物語が進んで行き自分のには最初からへんは少し謎なことが多くあり、読んでいて難しいなと思う部分がたくさんあった。貴瑚の家族の話になった時はとてもすごく嫌な気分になり貴瑚を応援したくなった。その家族の描写からは貴瑚が本当は母親のことが大好きでも母親から自分の価値を見出すようになり、辛いことや悲しいこと理不尽なことにも耐え続けて自分の存在を好きになって欲しいという気持ちにとっても読んで悲しくなったし、貴瑚の気持ちがよく伝わるエピソードでもとても大事な描写だなと思った。

そして貴瑚の口から「アンさん、アンさん」(p.29)と自分が弱く誰かを頼るセリフも自分の弱さを隠し切れない所で人間はとても弱い物なのだなと感じることができた。

そしてアンさんが出てきた時に1番印象に残ったのはアンさんが貴瑚のお母さんに対して、「いい加減そのうるさい口を閉じろよ、おばさん」(p.113)のセリフで読んでいる側はアンさんがとても貴瑚を大切に思っている、貴瑚のために口を開いた瞬間でもアンさんの貴瑚を救いたい気持ちが伝わってくるいい場面だと思ったのだけれども、貴瑚目線で物事を考えた時に、貴瑚はお母さんのことが本当はとても大好きで一緒にいたい気持ちも少しもあつたのではないかなと考えて、あの時の心境は本当は複雑な物でアンさんとお母さんどっちも好きだからアンさんのセリフはすごく嬉しいものだけれども何か心の中では複雑な思いがあつたのではないかなと自分は推測ができる。この一言でこれまでの推測ができるのはこの本のとても深い所だと思ふし、読んでいてとても楽しい所でもあると思う。また「52ヘルツのクジラか」(p.136)のセリフでは、この一言に収まらないぐらいの感情がこもっていると考ええる。友達がくれたMP3プレイヤーに心を救われた貴瑚は今までのことなどを振り返って、これなら少年を救える、自分と同じ道は歩ませないという気持ちが裏で考えられているセリフではないのかなと推測することができる。

そしてアンさんが死んでしまったと書かれた時はとても自分も複雑な気持ちになった。アンさんは心から貴瑚を大切にしている恋愛愛的な所でも好きだという描写はたくさんあり、特に印象に残ったセリフは、「大事だよ。キナコの幸せをずっと祈るくらいにはね」(p.200)の所で、そのセリフからは二つの心情が読み取れるのではないかなと思う。

まず貴瑚を本当に愛しているそれを思いっきりぶつけたい気持ちがあるのだけれども、自分の心の立場と貴瑚との距離感的に本当にこの気持ちを伝えていいのかという気持ちがあるのではないかなと推測できる。そして2つ目に悲しさが読み取れるものだと思う。

アンさんは本当の意味で貴瑚のそばにすることはできない、そういう思いが祈るくらいにはねというセリフにこめられていると考えることができるし裏返せばそばにいてあげたいという気持ちがこの文章からは伝わってくるのである。

「私、やっぱり主税がいなくてダメだ」(p.210)のところでは、貴瑚の弱い部分が出ているなと考えられる。まず、当時の恋人主税は表では貴瑚のことを大切にしているが裏では別に恋人がいて、少しに係関係で主税に対してこのセリフが出てくるのは貴瑚の弱いところでもあるし、成長していない部分であると思われる。

「あたしたち、ほんとに助かっているのよ、ありがとう。」(p.91)では母親の2つの気持ちがわかる。

まず、その時はありがとうと一時的な感情で言っていることと、もう一つは本当に思っていない口だけの言葉二つの気持ちがあると考えられる。

また最初に戻って「馬鹿? あんた」(p.1)はこの本の最初のセリフであり作者にとってはどんな人物か想像させる最初の重要な場面である中でこの言葉を持ってきた意味はとても深いものだと推測できる。なぜならこのセリフは一見強気な性格をイメージさせるが後々読んでいくと貴瑚はとても弱い心の持ち主であり、この冒頭のセリフのイメージとは真反対である。よって冒頭のイメージとは全く違うのである。それが作者の狙いでこの本をより面白くした冒頭のセリフであると推測できる。

この本は自分が一冊全部を読んだ2冊であり、普段全然本を読まない自分でも時間が早く過ぎるほど夢中になれる作品であり、とても複雑な内容で面白かった。この本を通して感じたのは自分の中で考察を混ぜながら読めばもっと深く入り込むことができるし、よりその作品を楽しむことができるのではないかなと感じました。

「わたしは、あんたの誰にも届かない52ヘルツの声を聴くよ」(p86)読み取れることは、このセリフは、世の中に無視され、理解されずにきた存在を「見つけたよ」「聴いているよ」と伝えるもの。救いの始まり…キナコが「52(少年)」の声に応えることで、彼にとつて人生で初めて自分の存在が認められる瞬間となります。このセリフは物語の核心であり、タイトル「52ヘルツのクジラたち」に直接つながる決定的な場面です。「よろしく、52」(p87)読み取れることは、自分を「誰か」とつて大切な存在」として認識された喜び。存在の肯定であり、それまで「ムシ」と呼ばれていた少年にとつて、「名前」は自分がこの世にいてよいという証。人とのつながりである呼び名を持つことは、他者との関係の第一歩。「誰かを支えるというのは素晴らしいことだよ。でも、自分の人生は自分のために使っていんだ。」(p110)読み取れることは、相手を「助ける」のではなく、「寄り添う」「感じる」ことの大切さ。他者との対等な関係で、一方的な支援ではなく、傷ついた者同士が対等に歩む姿勢を示す。実在するクジラに由来「52ヘルツのクジラ」は、実在するとされる「世界で最も孤独なクジラ」にちなんだ名称です。通常、クジラの鳴き声(周波数)は15〜25ヘルツほどですが、このクジラだけが52ヘルツという、他のクジラに届かない周波数で鳴いている。そのため、「仲間に気づいてもらえず、返事が返ってこない」孤独」と言われています。小説の中の意味「誰にも届かない声」作中で少年「52」は、家庭内で虐待を受け、誰にも助けを求められずに生きてきました。彼の「助けて」という声は、社会や周囲の人にまったく届かなかった。それがまるで「52ヘルツのクジラ」のようだったのです。2.「届かない声を聴く人」主人公・キナコもまた、心に深い傷を抱え、「52ヘルツの声」でしか話せない存在。だからこそ彼女は、少年の声を「聴くことができた」。題名は、「誰にも届かなかった声が、ようやく誰かに届いた奇跡」を示しています。「たち」と複数形になっている理由「クジラたち」と複数形になっているのは、孤独なのは少年1人ではなく、キナコを含めた「複数の存在」であることを示しています。誰にも届かない声を持つ人たちが、お互いの存在に気づき、少しずつ癒されていく過程が描かれています。

52ヘルツのクジラの鳴き声は、他のクジラたちに聞こえない、つまり孤立した存在を象徴するものとして知られています。この周波数の特異性は、彼らが他のクジラとコミュニケーションを取ることができない理由とされています。これが物語「52ヘルツのクジラたち」の中心テーマ、すなわち「孤独」として取り上げられています。孤独は単なる感情ではなく、社会との断絶や人間関係の希薄さをも意味します。このクジラの存在を通じて、町田そのこは読者に対し、孤独とは何か、そしてそれをどう受け入れるべきかを問いかけています。

例えば、周りに理解されないことのつらさ、それでも自分らしく生きる勇気の必要性、孤独を抱えながらも他者と繋がるうとする努力の大切さ、孤独が必ずしも悪いものではなく、自分を見つめ直す時間を与える側面もある。これらのテーマは、現代社会で孤独を感じる多くの人々にとつて深く共感できるものです。このクジラの存在は、読者に孤独との向き合い方を考えさせる重要な役割を果たしています。

クジラの鳴き声が伝える深いメッセージ
クジラの鳴き声は、単なる音ではなく、感情や意図を伝えるコミュニケーション手段として知られています。物語「52ヘルツのクジラたち」では、この鳴き声が象徴的な要素として、孤独や希望、そして繋がり、の切実さを表現しています。特に、52ヘルツという特異な周波数の鳴き声を持つ意味は非常に深いです。他者に届かない声として、現代社会の中で感じる「誰にも気づかれない孤独感」を表現、それでも鳴き続けることが、生きることそのものの意義を象徴や、周波数の違いが生む孤立感を通じて、多様性の受容の重要性を伝える。

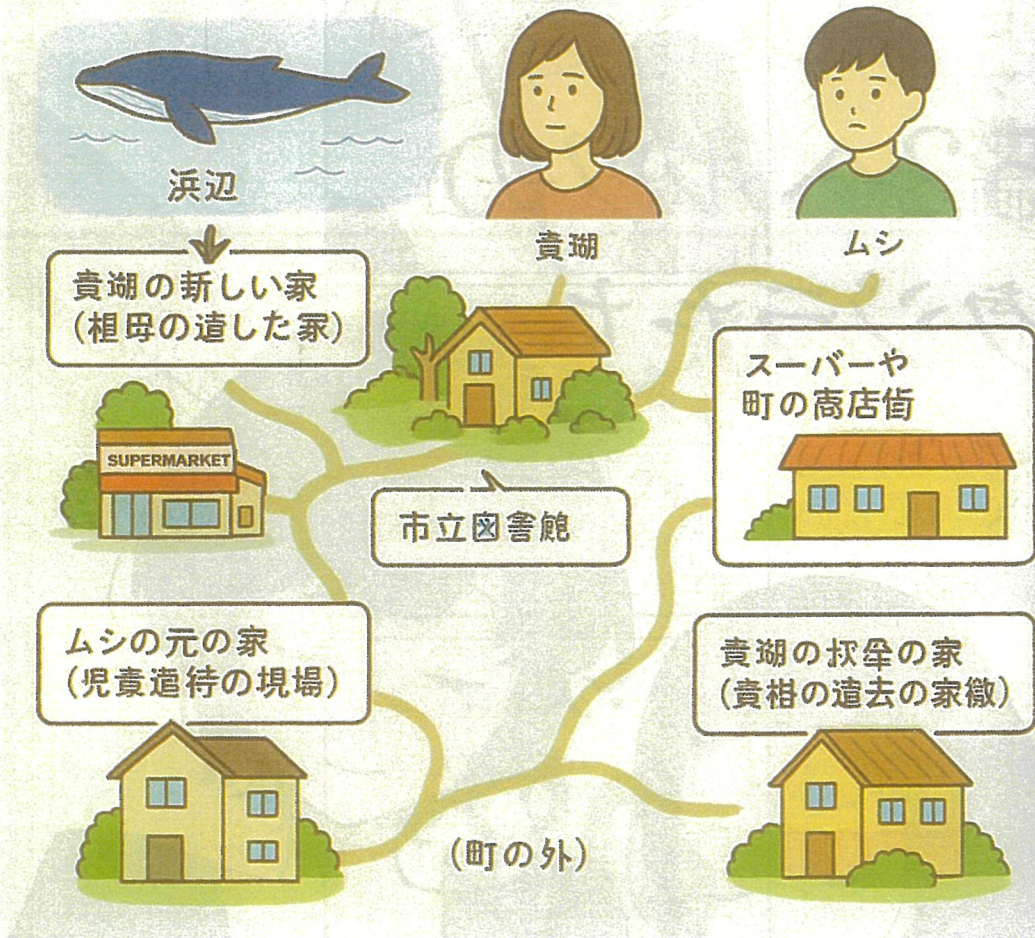
このように、クジラの鳴き声は物語の中で重要なメタファーとして機能しています。また、主人公たちの人生においても、この鳴き声がどのように彼らの選択や感情に影響を与えるのかが丁寧に描かれています。さらに、鳴き声そのものが持つ「音」としての特性が、読者の感覚に直接訴えかける要素となっています。読者はこの鳴き声を想像することで、物語の世界に深く入り込み、主人公たちの孤独や苦悩をより強く感じ取ることができます。

第2章 キミの住んでる世界



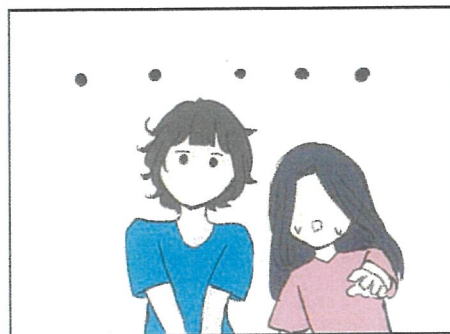
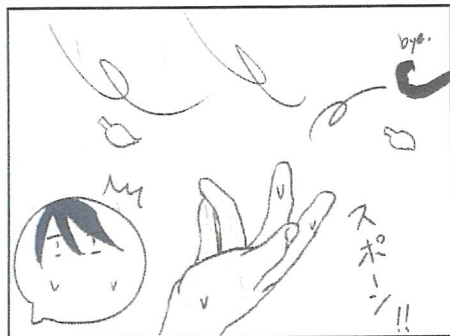
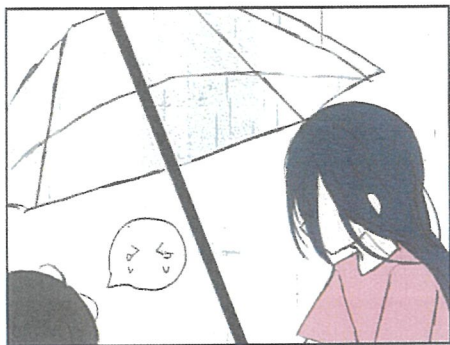
傷を抱え、東京から海辺の街の一軒家へと移り住んできた貴瑚は、虐待され、声を出せなくなった「ムシ」と呼ばれる少年と出会う。かつて自分も家族に虐待され、搾取されてきた彼女は、少年を見過ごすことが出来ず、一緒に暮らし始める。やがて、夢も未来もなかった少年に、たった一つの“願い”が芽生える。その願いをかなえることを決心した貴瑚は、自身の声なきSOSを聴き取り救い出してくれた、今はもう会えない安吾とのかけがえのない日々に想いを馳せ、あの時、聴けなかった声を聴くために、もう一度立ち上がる。

52ヘルツのクジラたち



生成AIで作成しました。

大分県の花沿いの田舎町。祖母の家があり、隣家や町の人々が生活している。花沿いの静かな村で、漁村的な雰囲気。古い一軒家、修理に来た大工や近所のおばちゃんたちとの交流も見られる。



52ヘルツの クジラたち



この作品は生成AIで作ったものではありません。

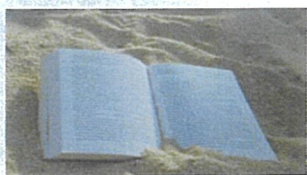
カランコエ：守る

みんなの趣味の園芸
https://www.shuminoengei.jp/?a=page_image_slideshow&target_c_album_image_id=298868&target_plant_code_sub=293

ゼラニウム：決心
となりのカインズさん

<https://magazine.cainz.com/article/112002>

この言葉たちが出る
シーンはとてもいい
ので小説を読む際ぜひ
楽しみにしてください。



あんたがその魂の番に出会
うまで、わたしが守るよ



一度目は
声を聴いてもらい、
二度目は声を聴くのだ

21

心に残った言葉集を
作り、その言葉に合
う花言葉の花をのせ
てみました。

ヒヤシンス：悲しみ

Pixabay

<https://pixabay.com/ja/photos/%E3%83%92%E3%83%A4%E3%82%B3%E3%82%B9-%E8%8A%B1%E6%98%A5-696491/>

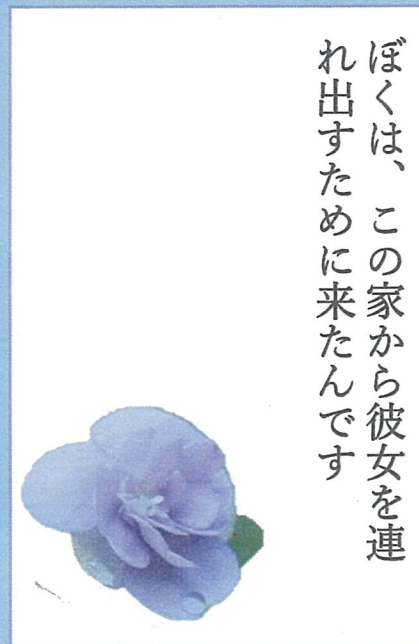
アキメネス：あなた
を救う

みんなの趣味の園芸

https://www.shuminoengei.jp/?a=page_image_slideshow&target_c_album_image_id=298868&target_plant_code_sub=293



わたしの声は誰にも届かな
い52ヘルツの声だったん
だ



ぼくは、この家から彼女を連
れ出すために来たんです

2

作者紹介

1980年3月8日生まれ
福岡出身
小説家
文学賞、本屋大賞受賞



町田そのこの作品



町田そのこの蛍たちの祈りは、深い喪失や心の痛みを抱えた人々が、小さな奇跡や出会いによって再生していく姿を描いた連作短編集である。人生のなかでふと立ち止まったとき、誰かの優しさや思いがそっと背中を押してくれるそんな温かな希望が込められているのである。静かで丁寧な語り口が読者の心に染み入り、日常のなかにある光や祈りの意味を再発見させてくれる作品である。

あとがき

「声が届かない」と感じる瞬間は、誰しもが経験することかもしれない。その孤独感は時に深く、心を締め付けるものだろう。しかし、『52ヘルツのクジラたち』が教えてくれるように、声を上げ続けることには意味があり、その声を聞こうとする人が必ず存在する。私たち一人ひとりが持つ「静かな声」は、時に自分自身さえも無視してしまいがちだが、その声に耳を傾け、言葉にすることで、世界とのつながりを少しずつ見つけることができるのではないだろうか。届くかどうかはわからない、それでも声を発することには価値があると信じたい。それがどんな形だって構わない。今は人々が気軽に他人とつながることができるこの世界で、声を上げることは無駄なんかじゃない。それは誰かを救う道になるし、誰かを助けるきっかけをくれるものだから。

高橋爽風

52ヘルツのクジラたち

2025年7月8日 初版発行

著者 高橋爽風／伊藤優希／阿部将馬／片倉悠／高橋建人

装丁 使用した画像があればここに明記する。